日本現代文學全集 16

正岡子規集

日本現代文學全集 16

正岡子規集

編集＝伊藤 整・亀井勝一郎・中村光夫・平野 謙・山本健吉

講談社

日本現代文學全集
16

正岡子規集

編集
伊藤　整
龜井勝一郎
中村光夫
平野　謙
山本健吉

初版　第1刷
昭和43年11月19日
增補改訂版　第1刷
昭和55年5月26日

著者　正岡子規

發行者　野間省一
發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽2-12-21
郵便番號　112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替　東京 8-3930

裝幀　蟹江征治

印刷　凸版印刷株式會社
製本　株式會社大進堂

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106163-2253 (1)　(文1)

正岡子規集　目次

卷頭寫眞

筆　蹟

竹の里歌……五

子規句集……二九

松蘿玉液……五七

墨汁一滴……八九

病牀六尺……一四三

小園の記……二〇一

車上所見……二〇三

飯待つ間……二〇五

柚味噌會……二〇七

闇汁圖解……二〇八

根岸草廬記事……二一〇

熊手と提灯……二一一

病……二一三

ラムプの影……二一六

車上の春光……二一七

明治卅三年十月十五日記事……二二〇

死　後……二二六

くだもの……二三〇
煩　悶……二三五
九月十四日の朝……二三六
歌よみに與ふる書……二三八
萬葉集卷十六……二五〇
芭蕉雜談……二五二
俳諧大要……二七二
明治二十九年の俳句界……三〇二
俳人蕪村……三三〇
水滸傳と八犬傳……三五二
仰臥漫錄……三六八
書　簡……四一三
作品解說……山本健吉　四二五
正岡子規入門……久保田正文　四三〇
年　譜……四三七
參考文獻……四四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

正岡子規集

下ふ新撰万葉集類題

[illegible]

竹の里歌

竹の里歌凡例

一、竹の里歌といふ名は先生自筆の歌稿に題してあつたのを其儘用ゐたのである。
一、右の歌稿には明治十五年から始まつて新體詩長歌をも併せ二千首許り記してある。其中から明治三十年以降の長歌十五首、旋頭歌十二首、短歌五百四十四首を拔いて本書に收めたのである。
一、選に預れるもの、伊藤左千夫、香取秀眞、岡麓、長塚節、蕨眞、安江秋水、森田義郎。
一、明治三十年以前を省いたのは先生が眞に歌の研究に心を寄せられたのは同年以後であるからである。
一、尙明治三十年より後も先生の趣味標準は年一年に進歩して居る。故に我等同人が先生の遺稿を選ぶのも前後六年を通じて一定の標準を以てしたわけでは無く、其年々の作中に於て取捨を決したのである。年次を以て項を分つたのは此の爲めで、旁先生が進歩の跡を知るの便宜もあらうかと思はれる。實に明治三十四五年頃の連作趣味は既に明治三十一二年頃に萌芽を發してゐたのである。
一、明治三十四五の兩年に作歌の少なかつたのは先生の病の漸く重かつた爲めである。

明治三十年

愚庵和尙より其庭になりたる柿なりとて十五ばかりおくられけるに　錄三首

御佛にそなへし柿ののこれるをわれにぞたびし十まりいつゝ

籠にもりて柿おくりきぬ古里の高尾の楓色づきにけん

柿の實のあまきもありぬ柿の實のしぶきもありぬしぶきぞうまき

明治三十一年

金州城外所見　一首

ものゝふの屍をさむる人もなし菫花さく春の山陰

とばり垂れて君いまださめず紅の牡丹の花に朝日さすなり

霜防ぐ菜畑の葉竹はや立てぬ筑波根颪雁を吹く頃

後夜の鐘三笠の山に月出でゝ南大門前雄鹿群れて行く

兒だちよな取りそ櫓の雀の巢雀子を思ふ母は汝を思ふ

緣先に玉卷く芭蕉玉解けて五尺の綠手水鉢を掩ふ

人も來ず春行く庭の水の上にこぼれてたまる山吹の花

都邊は埃立ちさわぐ橘の花散る里にいざ行きて寐む

夜一夜荒れし野分の朝凪ぎて妹が引き起す朝顏の垣

峯こえて樛多きがけの岨道に山別れする鷹を見るかな

金槐和歌集を讀む　一首

試みに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼の泣く聲聞こゆ

紅梅の咲く門とこそ聞きて來し根岸の里に

人尋ねわびつ

武藏野の冬枯芒婆々に化けず梟に化けて人に賣られたり

普陀落や岸うつ波とうたひつゝ柄杓手にして行くは誰が子ぞ

みまかりしまな子に似たる子順禮汝が父やある汝が母やある

宮島にともす燈籠の影落ちて夕汐みちぬ舟出さんとす

榛の木に烏芽を嚙む頃なれや雲山を出でゝ人畑をうつ

病みて臥す窓の橘花咲きて散りて實になりて猶病みて臥す

はら〳〵ともろこし黍を剝く音にしば〳〵さむる山里の夢

奥山の峯の紅葉に日は暮れていづくとも知らず猿啼く聞こゆ

日にうとき庭の垣根の霜柱水仙にそひて炭俵敷く

衣更へて端居し居れば蝦夷の人の手紙屆きぬ花咲くとあり

潮早き淡路の瀨戸の海狹ばみ重なりあひて白帆行くなり

病中對鏡　一首

昔見し面影もあらず衰へて鏡の人のほろほろと泣く

寂靜まる里のともし火皆消えて天の川白し竹藪の上に

貝拾ふ子等も歸りぬ夕霞鶴飛びわたる住吉の方に

風吹けば蘆の花散る難波潟夕汐滿ちて鶴低く飛ぶ

金州戰後　一首

山陰に家はあれども人住まぬ孤村の柳綠しにけり

金州從軍中作　錄一首

金州に旅寐し居れば日の本の春の夜に似る海棠の月

太鼓打つ雛は桃にぞ隱れける笛吹雛に櫻散るなり

敦盛の墓弔へば花もなし春風春雨播州に入る

筒井筒井筒は朽ちて古柳柳綠しぬのぞく子もなし

遠近に菜の花咲きて朝日さす榛の木がくれ人畑を打つ

いくさ過ぎて人なき村を來て見れば鵲すくふ道のべの木に

故鄕の梅の青葉の下陰に衣洗ふ妹の面影に立つ

綠立つ庭の小松の末低み上野の杉に鳶の居る見ゆ

立ち並ぶ榛も槻も若葉して日の照る朝を四十雀鳴く

夕顏の苗賣りに來し雨上り植ゑんとぞ思ふ夕顏の苗

若葉さす市の植木の下陰に金魚あきなふ夏は來にけり

橘の花散る里の紙幟昔忍びて鳴く郭公

岡ぞひの窪田溢れて人も馬も水踏みわたる五月雨の頃

神鳴のわづかに鳴れば唐茄子の臍とられじと葉隠れて居り

鳴神の鳴らす八鼓ことゝく敲きやぶりて雨晴れにけり

雲の峯殺生石の上に立ちて那須野を越ゆる旅人もなし

野らの木に百舌鳴く聞けば雨晴れぬ田刈れ棉とれ妹よ背よと鳴く

寒山も豐干も虎も眠りけり四つの鼾に松葉散る山

病間あり郊外を見めぐりて　一首

車して戸田の川邊をたどりきと故郷人に言つげやらむ

日本の國を　錄一首

たひらかに緑しきたる海の上に櫻花咲く八つの島山

大神宮炎上の事を　錄四首

さくゝしろいすゞの宮の神杉を燒きぬと聞くもかしこきものを

いたづらにしづめまつりし風の宮向ふほのほを吹きもかへさず

神風や伊勢の内外の宮柱燒くる御代にも逢はむと思へや

夏桑の畑に雪ふりわたらひのいすゞの宮に火は飛びまよふ

うたゝ寐のうたゝ苦しき夢さめて汗ふき居れば薔薇の花散る

簾捲く檐端の山の永き日を雲も起らず晝靜かなり

釣垂れて魚餌につかず蜻蛉のとまりては飛ぶ河骨の花

川上に鷄鳴く里の名も知らず山青くして家五つ六つ

辿り行く道窮りて鳥の鳴く木のくれしげみ白き花散る

仰むけに竹の實の子に打臥して背ひやゝと雲の行くを見る

神祇　錄一首

百照すともし火百の影落ちていつき島宮潮滿ちにけり

七月二十三日車にて角田川べをたどりて　錄二首

我昔住みにし跡を尋ぬれば櫻茂りて人老いにけり

月細き隅田の川の夕間暮待乳を見れば昔偲ばゆ

故郷を憶ふ　錄一首

故郷の御墓荒れけん夏草のゐぬのこ草の穗に出づるまでに

獄官聲高くして炎熱いよゝ加はる戲れに蒼蠅の歌を作る　九首

つかさあさる人をたとへば厨なる喰ひ殘しの飯の上の蠅

日の照す晝こそあらめ烏羽玉の夜を飛ぶ蠅のにくゝもあるか

馬の尾につきて走りし蠅もあらんとりのこされし牛の尻の蠅

屎蟲の臭きを笑ふ笑ふものは同じ厠の屎の上の蠅

憎き者うなじねを刺す蚊はあれど睡らんと

する顔の上の蠅

山も見えず鳥もかけらず五百日行く八重の汐路の船の中の蠅

世の中は馬屋のうしろの畑に生ふる唐撫子の花の上の蠅

世の中の憎さもこゝに終りけり炮碌の尻の黐の上の蠅

こゝも猶うき世なりけり草鞋編む田舍のをぢの背の上の蠅

徒然坊箱根より寫眞數葉を送りこしける返事に　八首

足たゝば箱根の七湯七夜寢て水海の月に舟うけましを

足たゝば不盡の高嶺のいたゞきをいかづちなして踏みならさましを

足たゝば二荒のおくの水海にひとり隱れて月を見ましを

足たゝば北インヂヤのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを

足たゝば蝦夷の栗原くぬ木原アイノが友と熊殺さましを

足たゝば新高山の山もとにいほり結びてバナナ植ゑましを

足たゝば大和山城うちめぐり須磨の浦わに晝寢せましを

足たゝば黃河の水をかち渉り華山の蓮の花剪らましを

われは　八首

ひむがしの京の丑寅松茂る上野の陰に晝寢すわれは

吉原の太鼓聞こえて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは

富士を踏みて歸りし人の物語聞きつゝ細き足さするわれは

昔せし童遊びをなつかしみこより花火に餘念なしわれは

いにしへの故鄕人のゑがきにし墨繪の竹に向ひ坐すわれは

人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは

菓物の核を小庭に蒔き置きて花咲き實のる年を待つわれは

世の人は四國猿とぞ笑ふなる四國の猿の子猿ぞわれは

杜甫石壕吏　錄二首

生ける者命を惜み死にすれば又かへり來ず孫一人あり

おうなわれ手力無くと裾かゝげ軍にゆかん米炊ぐべく

杜詩新婚別　錄三首

麻にまとひ蓬にからむ蔦の手の短かれとは我思はなくに

一夜たゞ君と契りて曉のあらあわたゞし遠き別れは

我せこの君はものゝふものゝふのその妻われも共に行くべく

淸人に代りて志を述ぶ　錄二首

空かける鳥言とはばやつこわれ猶世に在りと君に告げこそ

さしなみのやまとの國は狹けれど民ゆたか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なりのりにとるべく

淺草寺圖

草刈がうばらかりそけたてきとふ佛の寺は千歳へにけり

明治三十二年

繪あまたひろげ見てつくれる　錄九首

なむあみだ佛つくりがつくりたる佛見あげて驚くところ

もんどるのつはもの三人二人立ちて一人すわりて楯つくところ

岡の上に黑き人立ち天の川敵の陣屋に傾くところ

あるじ馬にしもべ四五人行き過ぎて傘持ひとり追ひ行くところ

木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ

うま人の裾濃のよそひ駒たてゝ遠くに人の琴彈くところ

かきつばた濃き紫の水滿ちて水鳥一つはね搔くところ

いかめしき古き建物荒れはてゝ月夜に獅子の壇のぼるところ

屋根の無き屋形の內に男君姫君あまた群れゐるところ

菅原や伊久米伊理毘古伊理毘古の陵こめて立つ霞かも

朝な〳〵竹藪になく鶯の庭の木迄はいまだ來ずけり

夜淸き片山陰の梅林月照り滿ちて鶴啼きわたる

ところ〴〵つゝじ花咲く小松原岡の日向にきゞす居る見ゆ

垣　錄三首

大森の里過ぎ行けば蜑が住む海苔麁垣の梅さかりなり

借りて住む磯の家居は海見えて白帆行くなり葦垣の外に

亡き友を埋めし墓のかなめ垣かなめ茂りて我老いにけり

霞む日をうてなに上り山を見る山遠くして心はるかなり

あら土の鑄型くづせばあな尊と佛の姿あらはれにけり

しもつけやしめぢが原に春暮れて葉廣さわらび人も訪ひ來ず

病牀喜晴　錄四首

臥しながら雨戸あけさせ朝日照る上野の森の晴をよろこぶ

朝牀に手洗ひ居れば窓近く鶯鳴きて今日も晴なり

目をさまし見れば二日の雨晴れてしめりし庭に日の照るうれし

カナリヤの囀り高し鳥彼れも人わが如く晴を喜ぶ

秀眞より奈良茶飯のたきやうを尋ねこしける返事のはしに

青丹よし奈良の茶飯のたきやうを歌人問はす名をなつかしみ

秀眞に贈る

へな土のへなの鑄形のへな〳〵に置物つくるその置物を

谷中瘡守に居る鹿洲の病めるに　二首

君が病瘡にあらねば瘡守の佛の力それもすべなく

病みて臥す御足の下の鑄物師を憐み給へ藥王菩薩

馬にして憐むべきは生臭きえせ法師らの車引く馬

むかばらの癎の朝臣に物申す藥といふぞかたつむり喰へ

病中把栗鼠骨二子牡丹の鉢を携へて來りけるに

おくり物牡丹の花の紅に草の庵は光滿ちけり

こいまろぶ病の床のくるしみの其側に牡丹咲くなり

把栗新婚　錄五首

米なくば共にかつゑん魚あらば片身分けんと此妹此背

よき妻を君は娶りぬ妻はあれど殊にかなひぬ君が妻君に

君が庭に植ゑば何花合歡の花夕になれば寐る合歡の花

をりふしのいさかひ事はありもせめ犬がくはずば猫にやれこそ

庭に生ふる蓬が中の戀草は花咲きにけり實や結ぶらん

金槐和歌集を讀む

大山のあふりの神を叱りけん將軍の歌を讀めばかしこし

夏月　錄三首

浪速津は家居をしげみ庭をなみ涼みする人屋根の上の月

庭の内をそゞろありけば月影にほのかに見ゆるひあふぎの花

海照す月を涼しみ灯の見ゆる向ひの島へ渡らんと思ふ

おのが寫眞を古き新しき取り出だして　錄一首

かりそめに寫し置きしがわが後のかたみと思へば悲しかりけり

百合　錄三首

足引の山のしげみの迷ひ路に人より高き白百合の花

人も來ぬ奥山路の百合の花神や宿らん折らんと思へど

天さかる鄙の小庭はつくろはず松に並びて百合の花あり

蟬　錄三首

物干の衣の袖に蟬鳴きて晝照草に日は夕なり

夢さめて戸いまだ明けぬ閨の中に蟬鳴く聞ゆ日和なるらし

椎の木の木末に蟬の聲老いてはつかに赤き鷄頭の花

浴泉雜記をよみて虚子に贈る　錄三首

君が行く伊豆の溫泉は我も知る水清くしてよき栖みどころ

世の中の兀嶺兀山後のために杉の林を植ゑんとぞ思ふ

天さかる鄙にし居れば大仁のうものはたけに芝居見るかも

蓬生の小庭の隅に吾妹子がめでゝ植ゑたるおしろいの花

種竹山人の支那漫遊を送る　錄四首

詩に名ある種竹山人支那に行くと歌もて送る竹の里人

廬山の雨赤壁の月そこに行きて君が作る詩いにしへしぬがん

門出にはたゝみて入れし詩の嚢車に載せて歸り來んかも

我庭の萩散る頃をから國の北の都に君入るらんか

始めて杖によりて立ちあがりて　一首

四年寐て一たびたてば木も草も皆眼の下に花咲きにけり

川に臨む生垣ありて水の上にこぼれんとする山茶花の花

柿を守る吝き法師が庭にいでゝほう〳〵といひて鴉追ひけり

武藏野に秋風吹けば故郷の新居の郡の芋をしぞ思ふ

羯南翁はじめて男子まうけたる喜びに　一首

八千ひろの淵の深きに住む龍の頤にある玉の如き子や

八百萬千萬神のいでたゝす雲の旅路はにぎはしきかも

天長節

久堅の天とこしへにあらがねの土うるほひて菊開く國

ふもとの新築見に行きて　錄三首

新しき庭なつかしみ足なへのわれ人の背に負はれつゝ來ぬ

君と我二人かたらふ窓の外のもみぢの梢横日さす也

新室に歌よみをれば棟近く雁がね啼きて茶は冷にけり

秀眞を訪ひし後秀眞におくる　錄一首

牛を割き葱を煮あつきもてなしを喜び居ると妻の君にいへ

夜を深み戀の遠道犬吠えて時雨からかさ袂ぬれけり

寧齋へかへし　錄二首

玉にあらず魚の目にあらずいづれをか玉と定めん魚の目といはん

起きて泣かば心やる方もありぬべし伏して泣く身をあはれと思へ

小石川まで（秀眞を訪ふ）　錄一首

しき物をあつみうれしみ家のごと股さしのべて物うち語る

明治三十三年

笠　錄二首

旅行くと都路さかり市川の笠賣る家に笠もとめ着つ

菅笠の小笠かぶりて下總の市路を行けど知る人もなし

茶　錄二首

テーブルの足高机うち圍み綠の蔭に茶をすする夏

秋の夜を書よみをれば離れ屋に茶をひく音

のかすかに聞こゆ

森　錄五首

鏡なすガラス張窓影透きて上野の森に雪つもる見ゆ

谷中路の森の下闇我行けば花堆きうま人の墓

藥練る山人尋ね入る山にくしき花咲く森の下草

道のべの楢の林に鶯の二つ來て鳴く明方にして

ちはやふる神の木立に月漏りて木の影動くきざはしの上に

ガラス窓　十三首

いたつきの閨のガラス戸影透きて小松の枝に雀飛ぶ見ゆ

病みこやる閨のガラスの窓の内に冬の日さしてさち草咲きぬ

朝な夕なガラスの窓によとたはる上野の森は見れど飽かぬかも

冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ

ビードロのガラス戸すかし向ひ家の棟の齊の花咲ける見ゆ

雪見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて雪見えずけり

窓の外の虫さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし

病みこもるガラスの窓の窓の外の物干竿に鴉なく見ゆ

物干に來居る鴉はガラス戸の内に文書く我見て鳴くか

常伏に伏せる足なへわがためにガラス戸張りし人よさちあれ

ビードロの鴛をつくりて雪つもる白銀の野を行かんとぞ思ふ

ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしきて木につもる見ゆ

曉の外の雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ

雪　三首

曉の鴛鴦の小衾靜かにて閨の外面は雪積りけり

鉢に植ゑしことぶき草のさち草の花を埋めて雪ふりにけり

朝日さす森の下道我が行けばほつ枝下枝の雪落つる音

二月例會席上　錄三首

朝な夕なガラス戸の外に紙鳶見えて此頃風の東吹くなり

砥部燒の乳の色なす花瓶に梅と椿と共に活けたり

いたつきの床べの瓶に梅いけて疊にちりし花も掃はず

夜梅　錄一首

閉したる園の外面の薄月夜梅の林を見て過ぎにけり

瓶梅　錄二首

墨さびし墨繪の竹の茂り葉の垂葉の下に梅いけにけり

瓶にさす梅はちれゝど庭にある梅の木咲かず風寒みかも

羯南氏男子を失へるに　一首

淵にすむ龍のあぎとの白玉を手に取ると見し夢はさめにけり

愚庵和尚のもとへ　錄二首

歌をそしり人をのゝしる文を見ば猶ながらへて世にありと思へ

折にふれて思ひぞいづる君が庵の竹安けきか釜恙なきか

三月四日例會

たらちねのうなゐ遊びの古雛の紅あせて人老いにけり

高どのに春の寒さをたれこめて朝寐し居れば花を賣る聲

もろこしの女神がつけし白玉のかざしに似たる水仙の花

上つ毛の新桑繭の小食にをし鳥ぬひて君を祝はん（新婚祝）

野の中の竹むら陰の葱畑に寒さ殘りて梅散りにけり

春夜　錄一首

くれなゐのとばりをもるゝともし火の光かすかに更くる春の夜

鎌倉懷古　錄一首

鎌倉の松葉が谷の道の邊に法を說きたる日蓮大菩薩

牛　錄二首

古國の伊豫の二名に馬はあれど牛がしろかく堅土にして

八千卷の書讀み盡きて蚊の如く瘦す〳〵生ける君牛を喰へ

春雨　錄四首

葛飾の小梅の里の小田ぞひに春雨小傘行くは誰が妹

江の島へ通ふ海原路絕えてみちくる春の汐の上の雨

ともし火の光に照す窓の外の牡丹にそゝぐ春の夜の雨

霜おほひ藥とりすつる芍藥の芽の紅に春の雨ふる

春の夜の衣桁に掛けし錦襴のぬひの孔雀を照すともし火

山の池の水際におふる篠の群の死ぬとも君に逢はんとぞ思ふ

我家の長物　錄二首

から酒に蟹ひてありし澁色の低き小瓶に梅を活けたり

カナリヤのつがひは逃げしとやの內に鶸のつがひを飼へど子生まず

四月一日例會　錄六首

久方の天つ少女が住むといふ星の都に行かんとぞ思ふ

草枕旅行く君を送り來て橋の柳の下に別れぬ

赤染の下着あらはに樽提げし島田男に花散りかゝる

菅の根の長き春日を言問はぬ小鳥と我と只向ひ居り

あづま路のあづまものゝふあともひて富士の裾野に御獵すらしも

夕日影照り返したる山陰の桃の林に煙立ちけり

獄中の鼠骨を懐ふ　十首

天地に恥ぢせぬ罪を犯したる君麻縄につながれにけり

大御代のまがねの人屋廣ければ君を容れけりぬす人と共に

御あがたの大きつかさをあなどりて罪なはれぬと聞けばかしこし

くろがねの人屋の飯の黑飯もわが大君のめぐみと思へ

豆の事をグンバ(軍馬)といふと人に聞きし人屋の豆のグンバ喰ふらむ

人屋なる君を思へば眞書餉の肴の上に涙落ちけり

ある日君わが草の戸をおとづれて人屋に行くと告げて去りけり

三とせ臥す我にたぐへてくろがねの人屋にこもる君をあはれむ

ぬば玉のやみの人屋に繋がれし君を思へば鐘鳴りわたる

君が居るまがねの窓は狹けれど天地のごとゆたけくおもほゆ

週間記事

三月廿八日（午後雹降る）

うらゝかにガラスを照す春の日のにはかに曇り雹ふり來る

三月廿九日（「我病」を草す）

ともし火のもとに長ぶみ書き居れば鶯鳴きぬ夜や明けぬらん

三月卅日（把栗來る）

詩をつくる友一人來て靑柳に燕飛ぶ畫をかきていにけり

三月卅一日（淺草公園失火の新聞）

翁さび火鉢かへして猩々が火事おこしきと聞けば可笑しも

四月一日（短歌月次會）

歌をよみにつどひし人の歸る夜半を花を催す雨瀧の如し

四月二日（湖村、節、四方太來る）

詩人去れば歌人坐にあり歌人去れば俳人來り永き日暮れぬ

四月三日（實方墓邊の藪柑子を送り來る）

實方の墓邊に生ひしやぶかうじ人に拔かれて歌によまれけり

病牀十日の内

四月四日

飼鳥の小鳥の餌にと植ゑおきし庭の小松菜花咲きにけり

四月八日（俳句會）

句つくりに今日來ぬ人は牛島の花の茶店に餅くひ居らん

四月十日

ガラス戸の外面さびしくふる雨に隣の櫻ぬれはえて見ゆ

四月十二日（左千夫來り夜一時頃去る）

一首

歌がたり夜はふけにけり竪川の君が庵に牛の乳取る頃

自作土像（秀眞へ）　錄一首

渾沌が二つに分れ天となり土となるその土がたわれは

悟不悟の歌（左千夫に贈る）　六首

茶博士をいやしき人と牛飼をたふとき業と知る時花咲く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com